

# 沖縄愛楽園

# 園内図

# Okinawa Airakuen

〒905-1635 沖縄県名護市字済井出1192番地  
TEL:0980-52-8331 FAX:0980-52-8967





## 国立療養所沖縄愛楽園の概要

開園年月：1938（S13）年11月

敷地面積：30万632平方メートル（約10万坪）

入所者数：228人 平均年齢：80.69歳

園内物故者数：1,275人

三井報恩会が「沖縄MTL相談所」を設立（1937（S12）年）。「沖縄県告示」（1938（S13）年）で「国頭愛楽園」と命名され、この年開園。その後、国立へ移管（1941（S16）年）された。琉球政府発足（1952（S27）年）と同時に琉球政府の所管となり、「沖縄愛楽園」に名称変更。日本復帰（1972（S47）年）に伴い厚生省に移管され、「国立療養所沖縄愛楽園」となる。

## 愛楽園発祥の地

昭和初期、沖縄の病者を伝道するため、私立の熊本回春病院から青木恵哉が沖縄に派遣された。沖縄ではハンセン病療養所設置について、県議会をはじめ各地で猛反対されすべて挫折し、病者は放置されたままだった。そのため青木は、住民から迫害をうけていた病者にキリストの福音を伝え生きる希望を与えながら、病者と共に掘り立て小屋やガマに住むなどして、沖縄各地を伝道して回った。

嵐山事件（1932（S7）年）や屋部の焼き討ち事件（1935（S10）年）などで各地を追われ、羽地内海の無人島ジャルマ島にたどり着くが、そこは風葬の墓場で水もない島だった。

「十坪でもいい、一坪でもいい。われわれが立っていて人が文句を言わぬ土地が欲しい」と願い、安住の地を求めて屋我地大堂原（うふどうばる）、現在の納骨堂あたり約9,900平方メートルの土地を自費購入。1935（S10）年12月28日、ジャルマ島から15人が上陸した。しかし近隣集落より偏見や差別、迫害を受けるなど産みの苦しみがあつ、苦難な歴史のなかで開園された。

「青木恵哉頌徳碑」は青木の出身地徳島県が寄贈したもの。真ん中が青木、側の二つが青木を支える病者をイメージしている。土台には青木らが偏見と差別を受けながら回った各集落の石がはめ込まれている。（「青木恵哉頌徳碑」の碑文をご参照下さい）

壕や井戸は青木らが掘った。青木が祈り瞑想し聖書研究したガマは、東海岸にある。

現在残る棧橋跡は、戦後に愛楽園の玄関口として使用され、棧橋の先には鉄製の浮き棧橋もあった。運天港からLST（舟艇）を利用して物資や入所者を運んだ。

この棧橋ができる前は、愛楽丸という蒸気船で伝馬船をひき、物資や入所者を運んでいた。

「声なき子供たちの碑」は強制墮胎（断種）により、世の光を見ることなく闇から闇へと葬られた「この世に声を上げたかったのにそれを許されなかった子供たち」の慰霊碑。



青木恵哉

## 早田壕

1944（S19）年早田<sup>ひろし</sup>園長の指事により、丘に横穴式の壕が掘られた。壕掘り作業のために手足を悪くした入所者が多く、当時は葉も不足し治療も十分に行うことができなかった。

10・10空襲時には壕の大体が完成しており、913人の入所者全員が避難することができた。10・10空襲後も、昼間は攻撃があるため入所者は壕内に避難していた。壕内では肩をすり寄せ身動きできない状態で、あたりが暗くなって攻撃がおさまったあと、壕外へ出て食べ物や水を探した。爆撃による死者は1人だが、栄養失調、マラリアなどで、1944年10月から翌年12月までに288人が死亡した。（「早田壕」の説明板をご参照下さい）



翼賛会（自治会の前身）幹部が入っていた壕

## スコアブランド公園

ロルフ・フォン・スコアブランド医師はドイツ生まれ。ドイツの大学に在学中、ナチス反対運動に参加し、米国に帰化した。

スコアブランドはハワイのハンセン病療養所で1年半働き、その時に沖縄が戦禍を浴びハンセン病患者も多いと聞いていた。

土木会社の医療部長として来沖、シーツ長官の信頼を得て、米国民政府の公衆衛生部長に就任した（1949年～1952年）。スコアブランドは、愛楽園を入所者自らの手でつくる民主的な園にしようと、指導と援助をした。

スコアブランドは医局の空の倉庫を薬品や衛生物資で満たし、焼け残った木材を使い掘り立て小屋で暮らしていた患者たちのために、建築資材を大量に運び込んだ。その資材を使い入所者自身の手により園の復興が始まった。

またプロミン治療をするためには十分な栄養が必要であったため、シーツ長官への嘆願書により食糧の特別配給が認められ、プロミン治療が開始された（1949年）。

「希望と自身の鐘」は、スコアブランドが愛楽園の入所者に生きていく希望を持って欲しいと願い寄贈した鐘である。（碑文をご参照下さい）

## 澄井小中学校

1951（S26）年9月開校～1981（S56）年3月閉校。療養生活のなか、253人が教育を受けた。

「澄井小中学校之碑」が建立されている。

## 三上森

戦時中、入所者が小高い森に病棟壕を構築した。三上千代看護婦長を中心に重病人や少年少女らの命が守られた壕である。

（「三上森の碑」をご参照下さい）

## 水タンク

病院施設や職員官舎用の水タンクで、地下水を汲み上げ使用していた。だが、空襲により使用不可能になった。

## 監禁室

法律で園長には入所者を罰する権利（懲戒束権）が与えられていたため、愛楽園には開園時（1938年）から、木造平屋建ての監禁室が、園長の懲戒束権を支えるために設置された。

さらに、1940年にコンクリート建ての監禁室を設置する。この監禁室は外部をコンクリート塀で囲み、扉には南京錠がかけられ、各部屋にはトイレ以外何もなく、まるで「刑務所」のようであった。主に無断外出をした入所者が、監禁処分になった。監禁室の存在は入所者にとって脅威であり、園外に出ることは重罪であるという意識を植え付けていく。

その後、1954年建て直され、1972年に准看護学校建設に伴い撤去されるまで、入所者に脅威を与え続けていた。

## 旧面会室

面会人が訪ねてきた際、入所者の部屋に入ることは許されておらずここで面会をしていた。面会室は部屋の真ん中が壁で仕切られていた。互いに椅子に座って、仕切り越しに職員立ち会いのもと面会をし、入所者は囚人のような取り扱いであった。自分の子供であっても抱くことや触れることは許されなかった。面会室西側にはコンクリートの塀があり、入所者地帯（有菌地帯）と職員地帯（無菌地帯）に分けられていた。この塀のそばに拍子木があり、入所者が夜中に病気になると拍子木を叩き、当直の看護婦に知らせた。医者と看護婦はマスク、手袋、帽子など予防着を着用して「完全武装」で園に入り、長靴（雨靴）のまま患者の畳の間に上がり込み診察を行った。



1945（S20）年の愛楽園



鐘の前に立つスコアブランド夫妻と入所者



監禁室



旧面会室（初代）